

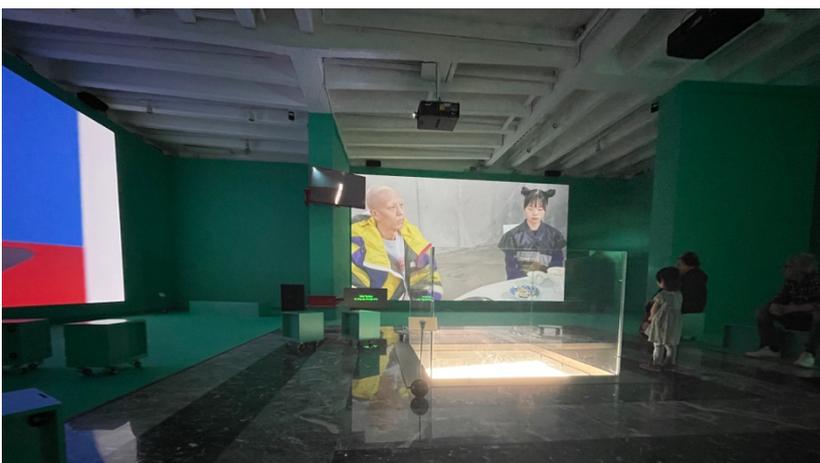
2025年1月から12月の研究活動報告

**【詳細は、<https://researchmap.jp/SM123> を参照】**

研究活動としては、「「間展」の間、磯崎新の間——ポストモダニズムの美学を再考する」科学研究費助成事業基盤研究C（2024年4月 - 2029年3月予定）の2年目を進めた。当初、予定していなかったこととして、磯崎没後最初となる大規模な展覧会「磯崎新：群島としての建築」（水戸芸術館、2025年11月1日～2026年1月25日）のゲスト・キュレーターを務めることになり、ここまでの科研の成果と、これまでの研究を総決算的に発表する機会となった。特に1979年にニューヨークに巡回した際に制作された、「寂」の部屋を一部再現し、会場図面を展示する機会となった。本展の準備を通じて、多くの新資料を見出すことにもなり、新たな研究課題が浮上した。



「磯崎新：群島としての建築」水戸芸術館、撮影：松井茂



第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館、撮影：松井茂

また青木淳がディレクターを務める、第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館（5月10日～11月23日）は、そのコンセプトが「間」展に基づいており、コンセプトブックに「Exposition MA

Espace-Temps au Japon, Musée des Arts Décoratifs, 1978」を寄稿することになった。

当初の予定として、「間」展におけるパフォーマンスのリサーチをすすめていたが、これについて、第77回舞踊学会大会で、口頭発表「磯崎新の身体観 舞踏から空中浮遊へ」を行った。

この他、藝術学関連学会連合第19回 公開シンポジウム「芸術と万国博覧会」で、美学会と舞踊学会の推薦で「テレビジョンの美学 日本万国博覧会と今野勉の1970年」を発表した。

詩の制作としては、「恵比寿映像祭2025「Docs —これはイメージです—」（東京都写真美術館、1月31日～2月16日）で、音声詩「時の声」と多和田葉子によるドイツ語訳を展示。この経験に基づき、日本記号学会第45回大会で、「ノイガンドレス再起動 「コンクリートポエトリー」を拡張する芸術実践」の口頭発表を行った。

2025年4月から研究科長を務める。その他、Art of listeningプロジェクトの活動、総合学、メディア表現基礎などの授業、担当学生の指導、各委員会の委員を務めた。

#### [論文]

"Exposition MA Espace-Temps au Japon, Musée des Arts Décoratifs, 1978," In-Between: What Future Awaits with Generative AI? pp.63-79

#### [口頭発表]

- ・「磯崎新の身体観 舞踏から空中浮遊へ」第77回舞踊学会大会、12月5日
- ・「ノイガンドレス再起動 「コンクリートポエトリー」を拡張する芸術実践」日本記号学会第45回大会、7月5日
- ・「テレビジョンの美学 日本万国博覧会と今野勉の1970年」藝術学関連学会連合第19回 公開シンポジウム「芸術と万国博覧会」、5月31日

#### [MISC]

- ・「ユーモアと本音が入り混じる脱力 読書にひと手間持った本（書評：ソフィ・カル『不在』『なぜなら』『限局性激痛』）」『週刊読書人』（3581）3月14日
- ・「モダンを考古学する批評理論 古典となった「悪い場所」（書評：榎木野衣『日本・現代・美術』）」『ちくま』（654）8月28日
- ・「分母をつくる仕事 音楽史が終わり、メディア・パフォーマンスの歴史が始まる（書評：川崎弘二『NHKの電子音楽』）」『週刊読書人』（3603）8月29日
- ・「田中泯が語る、坂本龍一と「言葉」」美術手帖web、11月11日